

# 英 語

乗 富 智 子

## 1 英語における「よりよい未来を志向する子」

ICTの発達やSNSの普及により、日本にいながら世界各国の文化に触れることは容易となった。また、金沢にも多くの外国人観光客が訪れるようになり、子どもが外国語に触れる機会が多い。このような社会の中で英語を学ぶことは、自分とは異なる文化や価値観に触れることであり、自分と他者を結び付けるきっかけとなる。多様な文化や他者に触れ、それを理解しようとする、そして相手にも自分を理解してもらおうと働きかけることが、「よりよい未来を志向する」ことにつながる。英語は他者とコミュニケーションを図る力を育む学習である。他者とコミュニケーションを図るためには、自分のことを伝える（Production）だけではなく、お互いが相手のことを理解しようとする（Reception）ことが不可欠である。「よりよい未来を志向する」ためには、この相互理解をめざしたコミュニケーションをくり返し経験していくことが重要であり、英語がその役割を果たしていくことになる。

新学習指導要領では、3・4年生で新たに「外国語活動」が、5・6年生で「外国語科」が導入されることとなり、小学校高学年で新たに教科として英語が学習されることとなった。外国語科の学習では、「外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成する」ことが目標とされている。語彙や文法などの知識を個別に身に付けるのではなく、実際のコミュニケーションの中で必要な知識を身に付け、活用し、思考・判断・表現することが求められている。

本校の英語では、英語表現だけでなく、コミュニケーションの内容を重視する。それによって、子どもが目的意識・相手意識をもち子どもが「知りたい」という思いをもって聞いたり「伝えたい」という思いをもって話したりできるようにする。聞いて理解することはコミュニケーションの大切な要素であり、聞くことは英語を身に付ける上で不可欠である。教師や友達とやりとりをする中で、たくさんの英語表現を聞いて理解することで子どもが必要な英語表現に気づき、学びながら「わかった」「伝わった」と感じることで授業をめざす。

以上のことから、英語における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・目的意識・相手意識をもって コミュニケーションを図ろうとする子
- ・教師や友達とのやりとりを通して 伝えたい内容を形成 再構築し 適切な表現を選択・活用できる子
- ・自分とは異なる文化や他者を理解しようとしたり 自分を理解してもらおうと働きかけたりする子

## 2 英語における決める授業デザイン

英語の授業で最も大切にしていることは、単元の学習を通して子どもにどのような姿になってほしいのかを具体的に考えることである。教師が思い描く子どもの姿や学習のねらいに応じてゴールを設定し、子どもが目的意識・相手意識をもって学習に取り組むことができるようにする。見通しをもってゴールに到達するために、学習計画を子どもとともに決める。

英語では、自分が相手に伝えたいこと（内容）をもち、それにふさわしい表現（言葉）を選び、それらを目的に応じてどのように伝えるのか（方略）を考え、表出するというプロセスを経験しながら学習する。教師や友達とのやりとりを通して、子どもが自分の伝えたい内容を深く考えたり、必要な表現に気付いたりし、適切な表現を選択する（決める）ことができるようにする。

英語は自己表現の活動が多く行われる。子どもはコミュニケーションを図ることで自分のことを伝えると同時に相手の意図や気持ちなどを理解することができる。英語でのコミュニケーションを通して、相手のことを深く知り、お互いに理解し合おうとする気持ちをもつ。自分と

の共通点を見いだしたり相手の意外な一面を知ったりすることで、他者との豊かな人間関係を築くことができるようにする。

### 3 決める授業の手だて

#### (1) 学びへの原動力を形成する「決める」

子どもが目的意識をもって学ぶためには、子どもの興味・関心を高め、英語でコミュニケーションを図る必要感がある場面や状況を設定することが重要である。子どもにとって必要感のある場面や状況を設定することで、子どもが生活経験、知識、既習表現などを活用し、理解したり表現したりすることができるようにする。

そのために、学習の到達目標となるゴールを設定し、そのゴールに向かってどのような学習をしていくとよいのか、見通しをもたせる。ゴールは子どもの「知りたい」「伝えたい」という思いをもとに設定し、相手意識をもって自己表現できるものとする。ゴールに到達するために、何をしなければならないか、どんな学習が必要かを子どもとともに考え、計画を決めていくことで、子どもが一つ一つの学習に目的意識をもって取り組むことができるようにする。

#### (2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

コミュニケーションをとるときには、必ず相手が存在する。そして自分が相手に伝えたいこと（内容）がある。相手に内容を理解してもらうためには、どのような言葉を用いるとよいのか、どのように表現するのかといった言葉や方略を工夫しなければならない。

そのために、まずは相手に伝えたいことをはっきりさせ、内容を考える時間を設定する。その際、相手は何を知りたいがっているのか、相手はどう考えるかなど、相手意識を明確にもたせることが重要である。さらに、教師や友達とのやりとりを通して、考える視点を広げる。教師が新たな情報を聞かせたり、友達と考えを共有したりすることで、伝えたい内容をもう一度深く考えることができるようにする。

また、自分の伝えたい内容に適した表現を決めるために、たくさんの英語表現に触れさせる。英語は外国語の学習であることから、子どもの語彙には限りがある。子どもが適切な表現を選択・活用していくためには、多様な英語表現に触れていかなければならない。子どもが知りたいと感じたときに教師がモデルを見せ、必要な表現に気付くことができるようにする。また、毎時間の授業で Teacher talk を行い、単元で扱う英語表現に関連のある単語や文構造を示す。クイズを出して復習をしたり、メディアに取り上げられている時事を簡単な英語で聞かせたり、季節や行事に合わせた話を聞かせたりなど、単元のゴールに直結しないような表現であっても、意味のある文脈の中で触れることができるようにする。

#### (3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

毎時間の授業で、自分の学びや他者からの学びをふり返り、ワークシートに記入する時間を設定する。ワークシートには、ねらいに達することができたかを自己評価する部分と、自由記述の部分設ける。自由記述では、気付いたことや考えたこと、感想などを書く。言いたかったことが伝えられたことや、伝えるために必要な表現を知ったこと、相手についてよりくわしく理解したことなどを自ら認識することで、子どもは自分の変容や成長を感じる。

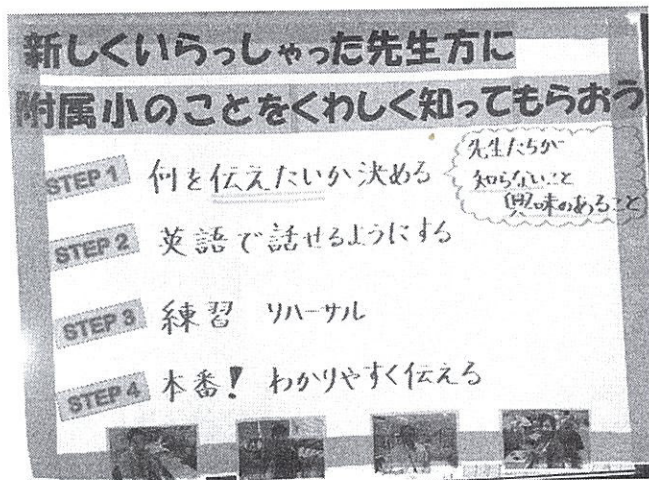
毎時間の授業に加えて、各単元や各学期での自分の学びをふり返る機会を設ける。単元や学期の終末に学習全体をふり返るワークシートを用意し、ゴールに到達することはできたか、見通しをもって学習することができたかを問う。また、単元でどのような力を身に付けたかを問うことで、子どもは自分を客観的にとらえることができる。そして、子どもは単元や学期のはじめにはできなかったことができるようになっていくことを実感し、自分の学びに満足感や達成感を味わうことができる。加えて、単元で身に付けた力が今後の生活においてどのような場面で生かすことができるのかを子どもが見いだすことができるようにする。さらに、実際のコミュニケーションの場面に当てはめ、子どもが学習したことを生かす場面を考えることができるようにする。

## (1) 学びの原動力を形成する「決める」

## 6年「Welcome to our school」の実践から

本単元では、英語でのコミュニケーションを通して、相手意識をもって附属小のことを伝えることをねらいとし、新任の先生に附属小を紹介するというゴールを設定した。本単元の学習を通じて、附属小で長い年月を過ごした子どもが、6年生の視点から見る学校のよさを改めて考え、自分の学校に愛着と誇りをもってほしいと考えた。

単元のはじめに、新任の教師を紹介した。子どもにとって新任教師とのかかわりに個人差があったため、情報の土台をそろえる必要があった。加えて、「よく知らない、新しく来た先生」に伝えるよりも、「～が好きで、～が得意な〇〇先生」に伝えるほうが、より相手意識が高まると考えたためである。事前に依頼したアンケートをもとに、前任校や好きな食べ物、得意なことなどを簡単な英語で聞かせた。新任教師がどのような人かがわかったところで、学習の計画を立てた。「新しくいらっしゃった先生方に附属小の紹介をしよう」という単元のゴールを確認し、「新しい先生に紹介するにはどんなことをしなければいけないかな。」と子どもに問いかけた。子どもは「先生たちが知らないことを教えたいから、知らないことを聞きたい。」「何を伝えたらいいかを決める。」「内容が決まったら、英語で話せるようにしないと。」など、ゴールを達成するために必要な学習を自分たちで決めていった（資料1）。授業



資料1 学習計画を決める

のふりかえりで、A児は「ゴールまでの流れをつかむことができた」、B児は「これからどうするかは分かりました」と感想を書いている。二人とも学習の流れを理解し、見通しをもつことはできた。ところが、「伝えたい内容が思い浮かびそうですか」の問いにA児はYESと答えている一方で、B児はNOと答えていた。A児は見通しをもちながら、すでに頭の中で伝えたいことを思い描いていたと考えられる。次の時間の授業の冒頭で、「何を伝えようかな。」と教師が問いかけると、A児は「附属小の伝統的な行事」「新しくはじまったマラソン大会について」「他の小学校と違うところ」

「お弁当の中身」「人気のおかずランキング」など、たくさんの事柄を挙げていた。B児は「なぜかしわっ子と言われるか」「体育館でできるスポーツ」にとどまり、あまり伝えたい内容を考えることができていなかった。これらのことから、A児は具体的なゴールのイメージがもっていたのに対し、B児は伝えたいことが思い浮かばず、具体的なイメージがもてていないことがわかる。しかし、この後のB児の様子を追っていくと、次第に伝えたい内容が明確になり、最終的には伝えたいことを決め、伝えることができていた。どのような手だてによりB児が変容したのか、次項にて詳述する。

## (2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

## 6年「Welcome to our school」の実践から

学習計画を決めたあと、グループごとにどの教師に何を伝えたいかを考えた。B児のグループは新任のN教諭に紹介することに決め、内容を考えていた。授業のはじめに伝えたいことをグループで考えたところ、「なぜかしわっ子と呼ばれるか」など附属小ならではのことを伝えようと考えていた。この段階での子どもの意識は「自分たちが先生に伝えたいこと」であり、相手が何を知りたがっているのか、どんなことに興味があるのかなど、相手のことに十分な意識が向いていなかった。そこで、相手意識をより高めるために教師から新任教師の様々なエピソードを聞かせた。エピソードの内容は主に前任校の特色、附属小に来て驚いた

こと、興味のあることなどである。これらのエピソードは事前アンケートをもとに教師が考え、英語で聞かせた（資料2）。

(N教諭) I'm from K elementary school. K elementary school also has 11 projects but we say "Inkai activities". The projects has an unique event. It is called "Jiman-taikai". The students show their special skills at the school gym.

資料2 新任教師のエピソード

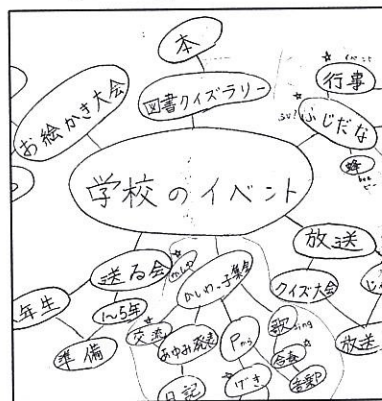
これらのエピソードを聞かせたあと、もう一度伝えたい内容を考えさせた。すると、B児のグループは次のように変化した（資料3）。



資料3 B児のグループの伝えたい内容の変化

B児のグループはN教諭がK小学校から転任してきたこと、K小学校には委員会活動があり、「じまん大会」というおもしろいイベントがあったことを聞き取った。これらのエピソードから、N教諭がイベントに興味があると理解し、プロジェクト活動や学校行事でのイベントについて伝えようとした。教師が前任校でのエピソードを聞かせたことにより、子どもが考えた内容に変化が見られた。自分たちが伝えたい内容だけではなく、相手の興味・関心に基づいた内容へと変わった。これは、教師が与えた情報により、考える視点が広がったためだと考えられる。相手は何を知りたいがっているのか、どんなことに興味があるのかを理解した上で内容を再構築させることで、より明確な相手意識をもつことができるとわかった。

資料3にあるような大まかな内容が決まった後、子どもはマッピングシートを作成した（資料4）。マッピングシートには、伝えたいことについて思いついたことをキーワードで書いていく。伝えたいことを文章ではなくキーワードで書かせることで、この後に学習する表現（文構造）が使いやすくなるようにした。また、マッピングシートにキーワードをつなげて書くことで、伝えたい内容がより細かく、具体的になる。資料4にあるように、B児は「学校のイベント」という大きなテーマから、送る会、かしわっ子集会、あゆみ発表、交流など、より具体的に伝えたい内容を考えていた。内容を考える授業のふりかえりを1時間ごとに追ってみると、B児の意識が次のように変化していた（資料5）。



資料4 B児のマッピングシート

(第1時)  
伝えたい内容はまだ思い浮かんでいません。ですが、これからどうするかは分かりました。

(第2時)  
前は伝えたい内容が思い浮かばなかったが、先生の前小学校のことを聞いて、伝えたい内容が思い浮かんだ。

(第3時)  
伝えたいことを書いてみることで具体的なイメージをもつことができ、良かったです。班の中でたくさん意見が出ました！

資料5 B児のふりかえりの変化

教師が前任校でのエピソードを聞かせ、マッピングシートでイメージを具体化することにより、B児の伝えたいことが明確になっていった。伝えたいことを漠然とイメージするだけでなく、「委員会活動」や「行事、イベント」などより具体的な言葉で子どもに聞かせたことで、伝えたい内容が明確になった。伝えたい内容を形成、再構築させるための手だてが、子どもがゴールの姿を具体的にイメージすることにも効果的であったことがわかった。

第4時では伝えたいことを伝えるために必要な英語表現を学んだ。本単元で主に扱う文構造は You can ~. や We have ~. である。この文構造に触れさせるために、Teacher talk を行った。Teacher talk の主な目的は、英語表現に触れ、文章の大まかな内容を聞いて理解する

ことである。Who am I?クイズやこの頃に行われる百万石祭り、氷室開きを題材として、本単元で扱う We have ~.や You can enjoy ~. You can see ~. の文構造にくり返し触れることができるようにした(資料6)。

You can enjoy the event in summer. (中略) You can eat Takoyaki, Yakisoba, cotton candy, and so on. This is a traditional festival in Kanazawa. We have the festival on June 2<sup>nd</sup>. What's the event?

資料6 百万石祭りを題材とした Teacher talk

第4時では子どもに「まずは英語で言ってみよう。」と、既習表現や知っている単語を使って言ってみようという活動を取り入れた。まずは言ってみようことで、自分が今言えること、言えないことが明確になる。言えないことを言えるようにするために、表現を知る必要が出てくる。そこで、どのような表現をすればよいのかを知りたいと子どもが感じたときに、教師がモデルを見せた。今回のモデルは、Teacher talk で使用した百万石祭りのクイズをもう一度聞かせた。内容をすでに理解している Teacher talk を再度用いることで、モデルとして示すときには使われている表現(文構造)に集中して聞くことができると考えたためである。

C児のグループは、普段2階にいたことが多いH教諭に、3階の教室について伝えようと考えていた。まず英語で言ってみよう活動では、「library (図書室)」「本 (book)」などの単語を並べることはできていたが、それを使って文章にすることはできなかった。「単語はわかるけど、文章はわからない。」「単語だけじゃ伝わらないから、文章で言えるようになりたい。」

fun in summer June  
explanation トライショナル

This is コンピューター room  
There are many コンピューターズ You can play game

資料7 C児が聞き取った英語表現(上)とC児が考えた文章(下)

と子どもが表現(文構造)を知りたいと感じたときに、教師がモデルを提示した。モデルを聞いて、C児が聞き取った内容は資料7(上)の通りである。C児は聞き覚えのある単語を中心に聞き取っており、教師がねらった文構造を聞き取ることはできていなかった。C児は聞き取れない単語を含んだ文章を耳にしたとき、聞き覚えのある単語を探して理解しようとしたのだと考えられる。

C児は、モデルを聞く段階では文構造に気付くことができなかったが、実際に自分たちの伝えたいことを英語の文章

にする場面では、モデルで示した文構造を使って説明することができていた(資料7下)。これはモジュール学習での影響が考えられる。以下にモジュール学習の実践について述べる。

6年「Welcome to our school (モジュール学習)」の実践から

モジュール学習では、主に英語を聞いて理解することをねらいとし、週3~4回、朝学習の15分間で実施している。本単元は We can! 2 の Unit 2 Welcome to Japan を参考に単元構成をしていることから、本単元で指導する文構造は We can! 2 で指導するものと同じである。そのため、モジュール学習では We have ~.や You can ~. という文構造をくり返し聞いた。特に、モジュール学習のはじめにはチャンツを扱い、ねらった文構造を聞いたりリズムよく

言ったりする経験を重ねてきた(資料8)。

Winter, spring, summer and autumn.  
Winter, spring, summer and fall.  
We have festivals in spring.  
You can enjoy hanami.  
It's beautiful.

資料8 モジュール学習のチャンツ

はじめ、子どもはトピックが異なることからモジュール学習と学校紹介の関連性を見いだすことができなかったが、学校紹介の授業で We have ~.や You can ~. という文構造がくり返し出てきたことから、少しずつ英語表現が同じであることに気づき始めていた。第4時で表現を学んだ後のモジュール学習で、「このチャンツの文章と同じような文章、聞いたことがない?」と問いかけると、子どもはすぐに「紹介する文章を作るときに、We have ~.とか You can ~.を使ったよ。」「どっちも have を使うん

だ。」と文構造の共通点を挙げていた。子どもが十分に文構造に慣れ親しんだことから、モジュールで学習している We have ~.と、学校紹介で使っている We have ~.が同じ意味を表す英語表現であるということに気付くことができた。

モジュール学習で十分に表現に慣れ親しんだことで、C児は文構造に気付き、資料7にあるように適切な表現を選ぶことができた。Teacher talk やモデルでねらった文構造を示すほかに、モジュール学習でくり返し表現に触れることが、適切な表現を選択・活用する上で非常に重要であると考えられる。

### (3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

#### 6年「Welcome to our school!」の実践から

本単元では、1時間ごとのふりかえりと、単元全体のふりかえりを行った。単元全体のふりかえりでは、ゴールに到達できたか、見通しをもって学習することができたかを問うほか、「単元で身に付けた力は何か」「身に付けた力や、できるようになったことは今後、どのような場面で役に立つか」を子どもに尋ねた。

附属小のイベントについて伝えたB児は、単元で身に付けた力について、「わかりやすく紹介する力」と答えた。また、「次の単元は先生の紹介クイズだから、今回の文章作りや自分のグループで使った単語、紹介する方法などを生かしていきたい」とふり返っており、本単元で学習したことを次の単元で生かそうとしていた。2年生を担任している新任教師に合宿について紹介したD児は、身に付けた力について「外国の人に話しかけられても瞬時に答えられる力」と答えていた(資料9)。D児のグループは、合宿について紹介したあと、相手の教師から「何がいちばん楽しかった?」とたずねられ、I like orienteering. I like campfire.などと答えていた。C児はこの経験から、いつか外国へ行ったときに、外国の人と英語で会話したり相手の言うことを聞き取ったりできる自分を思い描いていたのだと考えられる。

これらのふりかえりから、B児は次の単元へ、D児は自分の将来へと思いを広げ、未来を思い描いていたことがわかる。思い描く未来に違いはあるが、二人とも本単元の学習が未来に役立つことを感じ取っていた。このように、単元全体をふり返る際に身に付けた力やそれを生かす場面を考えさせることで、子どもは自分の学びが未来へつながっていることを感じることができる。

<どのような場面で役立つか>  
外国に合宿に行く時に英語で会話できるし、聞き取る事もできる。  
<ふりかえり>  
先生と英語で会話することによって、日常生活で外国人に会った時もすぐに話せる力が身に付いた。  
新しい先生が学校の紹介を終えた後に質問してきた問いかけは、外国人が急に問いかけてきた時に瞬時に答えられる力が身に付いたと思う。

資料9 D児の単元のふりかえり

### 成果と課題

決める授業の手だてにより、子どもは目的意識・相手意識をもって学習に取り組み、学習のゴールを達成することができた。また、教師の話す英語を聞いて考える視点を広げたことで、自分が伝えたい内容を深く考え、より相手意識を明確にして伝える内容を決める姿が見られた。また、Teacher talk やモジュール学習を活用してくり返し表現に慣れ親しませることで、文構造や単語などの表現を選択・活用することができるようになった。

文構造の習得にあたっては、モデルをどのような題材でどのように子どもに提示するのが鍵となる。本実践ではトピックの相違により、子どもが必要な英語表現に気付くことができなかった。子どもが必要としている英語表現を一斉にモデルとして提示する場合、子どもの思考の流れやニーズに合わせてモデルの内容や表現を吟味する必要がある。本実践では、45分授業とモジュール学習とを連動させることで、子どもの英語表現、主に文構造の習得に効果が見られた。本校では、モジュール学習を「聞くこと」に焦点を当てて実践している。今後、モジュール学習のねらいを明確にし、どのように活用していくことでより効果的な学習となるのかを検証していかなければならない。